

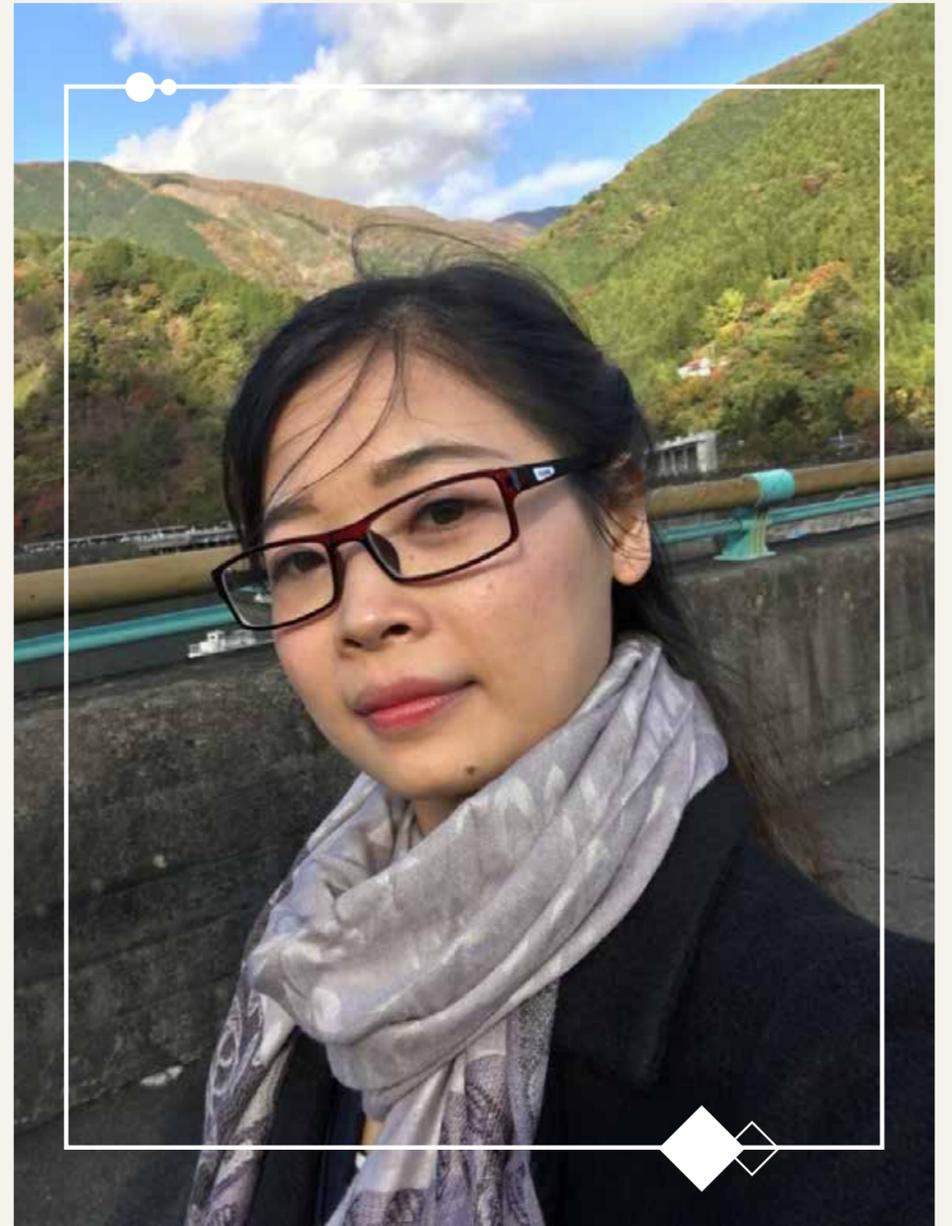
ルオン・トゥ・フォンさん

2012年6月：大学を卒業

2013年3月：日本留学

2016年：大学院で学業を続ける傍ら、日本のグループ会社が手掛けるベトナム看護プロジェクトのアドバイザーを務める

2017年：タイグエン省に拠点を置く鉢呂日本語センターの拠点長として、日本で就労するベトナム人看護学生向け日本語教育プロジェクトを管理



「私、日本へ行く夢を実現したんだなあって。」

大 学を卒業して、フォンさんが日本へ行ったのは8ヶ月ほど日本語を勉強した後の2013年3月のことです。日本に来て間もない頃の嬉しさと不安が募る日々のことは、ずっと忘れないそうです。

「遠い未知の国へ足を踏み入れた時の失望感、それは私が最初に抱いた感情です。今でも忘れることができません。その当時、とても悲しくて、でもどうしてなのか説明が付きませんでした。改めて見渡してみると、日本は素晴らしく、どこことなく心地良ささえ感じます。私、日本へ行く夢を実現したんだなあって。と言っても、心地良さより悲しさや不安の方が大きかったです。」

フォンさんによると、日本での生活に慣れるのにおよそ2ヶ月かかったそうです。新生活に適應するにつれ、悲しい気持ちは次第に薄れ、旅行を通して新たな発見や体験を重ねていきました。

週末には、よく近場の公園に足を運びました。フルーツが旬な時期になると、いちご狩りやりんご狩り、もも狩りにも行きました。夏場はビーチへ。東京近郊のビーチなら江ノ島。秋の紅葉を楽しむなら立川公園。千葉方面には、いちご狩りやりんご狩りができる場所が沢山あります。週末にキャンプへ行くなら、袖ヶ浦にあるドイツ村。桜が一番きれいな場所は、おそらく上野公園。花火観賞なら、7月に開催される浅草寺。花火はそこから打ち上げられますので。」

語学学校を出た後、フォンさんは大学院へと進み、ベトナムの大学で社会福祉を専攻したことから、日本の大学院の専攻も同じ分野を選びました。

「大学院で勉強していた2016年頃、とあるグループ会社が手掛けるベトナムの看護教育プロジェクトのことを知り、ベトナム事情に関して、私から幾つかアドバイスをさせていただきました。大学院を修了後、そのグループ会社へ就職を決めました。」

日本語の「いいよ」が意味するところ

「日本でN4からN3までの勉強を終えましたが、自分の日本語力はN5レベル程度とっていました。「いいよ」ということばについて、大丈夫と理解されることもあります。いらない、する必要はないという意味もあります。学校が紹介するアルバイトの話をして、5、6人の学生で聞いた時の話。担当者が何か物を取り出して、説明に際してそれを開ける必要がありました。開けるのに苦労しているのをみかねた私は、お手伝いしましょうかと申し出ました。それに対する返事は、「いいよ」。その意味するところは、不要ということ。でも、お願いという意味だと思い込み、やってあげようと思いました。早速取りかかって、周りの人が止めに入りました。「大丈夫」と。ようやく状況を呑み込んだ私は、お手伝いは不要なのだと理解しました。このことは、ずっと私の頭の中の記憶に残っていて、日本語のことばの使い方を知る勉強になりました」

日本で生活を始めてからの2年間、フォンさんは節約のために自炊し、学校にはお弁当を持参したそうです。

「調理用の油を買いにスーパーへ行ったときの話。油ということばはおろか、どういう漢字だったのかすら覚えていません。油のボトルに似たものを買って帰ればいいや、と。後になって、お酢のボトルを買ってしまったことがわかり…(笑)」

「周囲の人に助けを求める」

「問題にぶつかった時は、憶測を捨てて、危険を冒さないようにと学生に言い聞かせています。分からないままやろうとすると、裏目に出ることもありますし、まずは周囲の人に助けを求めるのが得策。例えば、語学学校であれば生活指導の担当者、組合なら担当の人という具合に。きっと納得がいくまで教えてくれるに違いありません。」

日本へ来たたての頃、フォンさん自身も周囲にいる親切な人たちに助けられたと言います。

「ある日の朝、寮にガス会社の人に来て、ガスの契約に合わせて、使い方の説明を受けました。ガス会社の方は、再度元栓を閉めて帰っていきました。その人の説明を完璧には理解していません。お昼時になって、ご飯を作ろうと思うものの、開栓の仕方が分かりません。午後になって、学校の生活指導の担当の人に聞きました。家で自分で元栓を開閉できるように、とても丁寧に教えてもらいました。」

ベトナムにいるうちに、できるだけ多くを勉強しておくのが得策

実際に、訪日前に語学の準備をしっかり行って、自信もあり、早い段階で日本の生活に適應するベトナムもいます。でも、準備を怠る人は、後々困る羽目に。

日本へ行く人たちには、それらを含めて素晴らしい経験なのだと思います。心配なのは、知ってるからわざわざ日本へ行かない、という声が聞こえてきそうなこと。日本はバラ色ではないというのは、単にことばや文化の違いで起こるトラブルに遭遇したというだけの話。バラ色にするかどうかは、あなた次第。そして、彩る最初の一步こそ、ことばに他なりません。ことばが豊かであればあるほど交流の幅が広がり、多くのチャンスに巡り合うことができるでしょう。

あなたへのヒント

日本留学を目指す人へ、日本での学校選びに役立つヒントをフォンさんに伺いました。

Q：日本留学に際して、どうやって学校を探しましたか？

A：まず、私は東京エリアにある大学の修士課程に進むという目標を立てました。その基準を元に、留学コンサルティングのセンター長に学校を探していただきました。

→留学先の学校を探す場合、フォンさんのように具体的な目標を設定することも一つです。そうすることで、担当者はあなたの希望にマッチした適切な選択をしてくれることでしょう。

Q：現在の仕事に就きたいきさは？

A：大学院時代、論文指導教官から、看護系の会社がセミナーを行うとの情報を得て、実際にセミナーに参加したところ、その会社からアドバイザーになってもらえないかと依頼を受けました。大学院を卒業後、その会社の正社員になったというのが経緯です。

→お仕事に巡り合ったのは、セミナーへ参加したからなのか、あるいは大学の先生から紹介を受けたおかげかもしれません。授業に積極的に参加して先生によい印象をもってもらい、チャンスを掴む準備を整えることができれば、可能性はより広がっていくことでしょう。